

アニマルサンクチュアリ(野生動物の聖域)のための活動について

プロローグ



昨年11月から人家近くでツキノワグマの目撃情報や被害が続きました。夜間パトロールや猟友会による山への追い上げなどを行いました。人家のゴミを襲う事態に進展し、捕獲をすることになりました。

捕獲されたのは1頭のゴグマでした。出没していた親子の内の1頭でした。

何とか殺さずにこのゴグマをお母さんの元へ返したい... その場にいた誰もが感じたことです。しかし、引き取り先も見つからず、殺処分することになりました。

—小さなクマの命は人間の手によってそこで終わりました—

結局、私はレンジャーとしてこのクマのために何もできませんでした。悔しくて悲しくて情けなかった。しかし、この感情に浸るのではなくこのゴグマの命を無駄にしない、命の責任を負うことを決意しました。

その場にいた他のレンジャーも同じでした。

自分にできることで、ゴグマの命を無駄にしないと話し合いました。

そして、クマの目撃が続く頃から動き始めた「森にクリを植えよう」という活動への思いが強くなったのです。
(加瀬澤)

あきる野の森と野生動物

日本に生息する大型哺乳類は、ヒグマ、ツキノワグマ、ニホンジカ、ニホンカモシカ、イノシシ、ニホンザルが挙げられます。あきる野市には、ヒグマ以外のこれらの大型哺乳類すべてが生息しています。あきる野市の山(森・山林)にはこれらの動物が生息できる環境がまだまだあります。このことを「豊かな自然がある」と手放しには喜べません。

昨年末の市街地でのツキノワグマの出没などは、山でのドングリ類の不作による餌不足が原因と理解しています。このことから、山でのクマの生息もギリギリの状態と言えます。

ここで不思議なのは、市内の森は70%近くが人工林(スギ・ヒノキ)で、残りがコナラなどを中心とした広葉樹林になります。

これまで、針葉樹林には野生動物が暮らせない、野生動物の為に広葉樹林に切り替えた方が良いという

話が主流ですが、私たちの痕跡調査では人工林内でも沢山のクマのフン、クマ剥ぎ、シカ舞台、シカの溜めフン、角研ぎ痕など様々な痕跡を目にしています。これらの人工林は60年前後で壮齢期~老齢期への移行過程となっている森でした。

このことから、**壮齢・老齢林では人工林とは言え、野生動物が生息できる環境を持っていると考えられます。**
(杉野)



ニホンジカのフン(針葉樹林内で)クマ剥ぎ(60年生前後のスギに)



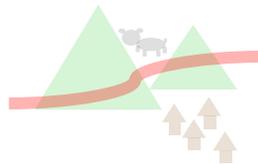
痕跡調査からわかること

あきる野に生息するツキノワグマは、痕跡から推測すると複数頭います。これは思いのほか生息密度が高いのかもしれません。だから人里にクマが出没すると思う方もいますが、ツキノワグマの保護管理計画作成マニュアルでは、「人里での人身被害は生息密度や個体群の大きさに比例するわけではなく、廃果や残飯などの誘因が人里にクマを近づける」と書かれています。

今回のあきる野の事例でも未収穫のキウイフルーツが誘因となった経緯があります。クマは学習能力が高く、人里のエサ資源を採食すると、それに固執して人を恐れなくなると言われています。

あきる野市でも山への追い上げを続けましたが効果を上げることができず殺処分しました。「**野生動物との棲み分け**」を考えた時、この処置は仕方なかったと考えます。

あきる野に生息するツキノワグマの多くは、これまで目撃情報もなく、私たちの奥山での痕跡調査で確認したのですが、これはクマが山の中でひっそりと暮らしていると言えます。基本的に臆病な生き物で、人と接触することを極端に嫌います。これらのクマ達がこれまで通りにひっそりと暮らしていけることが一番だと考えています。



野生動物との棲み分けを目指して



1月13日コレンジャーによる植樹



3月16日地域の賛同者有志による植樹



今回のクマのための植樹をヤマグリとしたのは、ドングリ類のなかでも比較的豊凶の差が少ないため選んだ樹種です。コレンジャーでの植栽を含めて10本のヤマグリを植栽しました。10本という本数を少なく感じるかもしれませんが、上記のようにあきる野にはニホンジカ、ニホンカモシカが生息しています。一度に大面積での樹種変換は、皆伐後にこれらのシカ類の生息密度が上がり、森林被害を助長させる要因と言われています。

自然界は微妙なバランスの上に成り立っており、クマの為に大面積で植樹をするとシカ類の森林被害の拡大などで、逆に大きな環境負荷をかける心配がでてきます。「持続的」に森や野生生物とかわかっていくために、息の長い植樹活動が重要になってきます。



(杉野)

※次回は7月。下刈り作業です。

野生動物が暮らせる森は

今回の植樹活動は、あきる野の森を考えた時には小さな一歩かもしれませんが、しかし、森はそうやって作られてきたのです。小さな誰か（野生動物と人）の行動が森を構成する一部となっていきます。小さな一歩がつながり合い持続していけば、やがて誰かの命を育むでしょう。そして、その森が存在しないと人も生きていけません。

私たちの「アニマルサンクチュアリのための活動」は、野生動物だけではなく、棲み分けをしながら共に暮らせ

る森づくり活動として調査を踏まえた行動を継続していきます。



↑ コレンジャーと一緒に、小型哺乳類の為に実をつける下層植生の植栽も行いました。(加瀬澤)